

## 初代校長フランク・ミュラーと日語学校の教育

The First Director, Frank Müller and the Education  
in Nichigo Gakko

竹 本 英 代

Hideyo TAKEMOTO

学校教育講座

(平成18年10月2日受理)

### 1. 本稿の目的

日語学校は欧米人に対する日本語教育を目的として1913（大正2）年に創設され、三十年余の長期にわたって存在した。この学校は、『日本語教育事典』のなかで、「戦前、我が国において長期に継続した組織的な日本語教育機関」<sup>1)</sup>と説明されている。しかしこの記述は、日語文化学校時代（1930年に日語学校は日語文化学校に改称）に秘書をしていた松宮一也の記憶と伝聞の域にとどまり、実態については全く明らかになっていない。

日語学校は、【表1】のように九度も校舎を移転しながら存在し続けた。

【表1】日語学校の校舎移転先

年	月	移 転 先
1913	10	東京外国語学校内に設置（東京市神田区錦町3丁目13番地）
1918	9	基督教青年会同盟本部（東京市神田区表猿楽町10番地）
1922	10	木造二階建て校舎新築（東京市赤坂区氷川町17番地）
1923	9	神戸 東京府豊島郡長崎村字地藏堂1517番地
1924	9	聖坂基督友会の持ち家（東京市芝区三田切運町30番地）
1927	10	東京基督教青年会館内（東京市神田区美土代町3番3番地） 東京三崎会館内（東京市神田区三崎町1丁目4番地）
1930	2	東京基督教青年会館内（東京市神田区美土代町3番3番地）
1936	9	校舎新設（東京市芝区芝公園9号3番）

注)「学校設置 日語学校」1913年,「進達書 日語学校」1922年,「申告書 日語学校」1924年,「移転届 日語学校」1927年,「移転届 日語学校」1930年,「設置者変更 日語文化協会」1939年,以上は東京都公文書館所蔵資料『東京府文書』(東京府文書館所蔵)。ならびに「大正七年度事務報告」『平和時報』第7巻第3号,1919年2月28日,8頁,より作成。

校長の転出や度重なる校舎の移動のなかで,教育の実態もその都度変化していたと考えら

れる。そこで本稿では、日語学校の実態を解明する研究の一環として、設立後の五年間をとりあげ、当時の状況を分析していきたい。最初の五年間は、初代校長フランク・ミュラー（Müller, Frank, 1864-1917）が在職していた時期に相当し、同校の教育にはミュラーの影響があったと考えられるからである。

## 2. 設立時の状況

国内の宣教師の要求と平和運動の潮流のなかで、日語学校は創設された<sup>2)</sup>。まず東京府に提出された往復文書<sup>3)</sup>を中心に日語学校についてみていこう。

設立者阪谷芳郎は、1913（大正2）年9月15日に東京外国語学校長村上直次郎に同校舎の一部使用を願い出た。日語学校には、東京外国語学校の四部屋が割り当てられた。部屋の使用期限は、10月1日から1914（大正3）年6月30日までであった。10月3日、阪谷は東京府知事宗像政に私立日語学校設置の件を申請し、同月7日に日語学校は私立の各種学校として認可された。「私立日本語学校設立要項」（以下、「要項」と略記する）は次の十項からなる。

- 一 本校ハ外国人ニ日本語ヲ教授シ外国人ノ為メニ歴史、文学、宗教、制度、風俗其他日本ノ事物ニ関スル講筵ヲ開クヲ以テ目的トス
- 二 本校ハ私立日語学校ト称ス
- 三 本校ハ東京市神田区錦町三丁目十三番地東京外国語学校内ニ設ク
- 四 校舎ノ平面図及校舎使用許可書ノ写（別紙ノ通）
- 五 校地ハ東ハ民屋所在地ニ接シ北西南三方ハ街路ニ面シ飲料水ノ供給ハ水道ニ仰グ
- 六 私立日語学校規則（略）
- 七 本校ハ大正二年十月廿一日ヲ以テ開校トス
- 八 本校生徒ノ定員ハ本科六十人速成科二十人トス
- 九 経費（略）
- 十 設立者履歴書（別紙）

同校は、「外国人ニ日本語ヲ教授シ外国人ノ為メニ歴史、文学、宗教、制度、風俗其他日本ノ事物ニ関スル講筵ヲ開クヲ以テ目的」とし、10月21日に開校した。第六項の「私立日語学校規則」（以下、「規則」と略記する）をみると、日語学校の詳細を知ることができる。「規則」第一条は「要項」の第二項、第二条は「要項」の第一項である。修業年限は本科三年、速成科一年であった（「規則」第三条）。学年は10月1日から翌年9月30日まで（「規則」第四条）とし、学期は、第一学期（10月1日～12月23日）、第二学期（1月8日～3月31日）、第三学期（4月8日～6月30日）の三学期制をとった（「規則」第五条）。休業は土日、祝日、大祭日、冬・春・夏季休業とした（「規則」第六条）。

本科の授業時数は週15時間、速成科は週2時間であり、学科目は【表2】のとおりである（「規則」第七条）。

【表2】日語学校の学科目

本 科	1 年	2 年	3 年
日 本 語	発音、聴方 読方、書方 話方、綴方、習字	講読、会話 口語文法 作文、習字	講読、会話 演説、文語文法 作文、習字

速成科	1 年
日本語	発音，聴方 読方，書方 話方，綴方

注)「学校設置 日語学校」1913年，東京都公文書館所蔵資料『東京府文書』（東京府文書館所蔵）より作成。

本科は三学年にわたり約週一回，日本の歴史，文学，宗教，制度，風俗に関する講義を開くこととした（「規則」第7条）。本科の授業は午前9時から午後5時まで行われ，速成科は午後5時以降に設けられた（「規則」第八条）。学期末には当該期間に修めた学科について試験がなされた。評点は各科目100点満点とし，50点を及第点とした（「規則」第九条）。所定の学科を修めて試験に合格した者には修了証書が授与された（「規則」第十条）。

入学時期は学年初めとしたが，欠員があるときは試験の上，臨時入学が許された（「規則」第十一条）。授業料は本科一学年120円とし，一学期に50円，二学期に40円，三学期に30円を納入することになっていた（「規則」第十四条）。ただし夫婦が同時に就学するときは，一人90円とし，前率により三期にわけて分納することとした。一方速成科は，一学年72円で毎月8円を納入することになっていた。

職員は，理事15名，校長1人，教員数名，事務員1人であった（「規則」第十五条）。理事の仕事は同校の財産を管理し，一切の事務処理を行うことであった。校長は理事の命を受けて，校務を掌握し，教員は校長の指揮を受けて授業を担当することとした。事務員は理事と校長の命を受けて，庶務と会計に従事することになっていた。

創設経費は100円，経常費は5430円であった（「要項」第九項）。創設経費と経常費は寄付金と授業料収入で支弁され，仮に授業料収入が予定額に達しない場合は，向こう二年間は年額2000円以内の寄付金が予定されていた。

### 3. 初年度の状況 —1913年～1914年—

それでは，日語学校は実際にどのような教育を行っていたのか。創設一年目について分析を試みる。

初年度，日語学校では本科一，二年と，夜間の短期本科コースが開設された<sup>4)</sup>。本科三年は設置されなかった。創設当初の生徒数は約45名であり，内訳はイギリス人，カナダ人，アメリカ人であった<sup>5)</sup>。「要項」第八項によれば，日語学校の定員は本科60名，速成科20名としたので，創設当時は定員割れであった。一学期は，本科一年21名，特別初心者クラス6名，本科二年20名，夜間クラス13名（東京4名，横浜9名）が学んだ<sup>6)</sup>。

日語学校の理事は，阪谷芳郎（名誉理事），村上直次郎（副理事），E.W.フレイザー，R.J.キルビー，福岡秀猪，H.H.コーツ，W.インブリー，H.ペドレー，C.B.テニー，G.ボールズ，姉崎正治の11名であった<sup>7)</sup>。「規則」第十五条では理事は15名とされたが，初年度は11名であり，理事のうち，H.H.コーツ，W.インブリー，H.ペドレー，C.B.テニー，G.ボールズの5名は連合ミッション会議（The Conference of Federated Missions）の実行委員でもあった。そこでミッション会議から選出された日語学校の理事の名簿を【表3】にまとめてみた。

【表 3】1913年から1918年までの日語学校理事

任命年	日 語 学 校 理 事	
1913	H.H.Coates W.Imbrie H.Pedley (D.C.Greene死後)	Gilbert Bowles C.B.Tenny
1914	H.H.Coates W.Imbrie H.Pedley	Gilbert Bowles C.B.Tenny
1915	H.H.Coates A.Oltmans H.Pedley	Gilbert Bowles C.B.Tenny
1916	Gilbert Bowles (1917年まで) H.H.Coates (1918年まで) C.S.Davison (1919年まで)	A.Oltmans (1917年まで) C.B.Tenny (1918年まで)
1917	H.H.Coates (1918年まで) C.S.Davison (1919年まで) W.P.Buncombe (1920年まで)	W.Axling (1918年まで) A.Oltmans (1920年まで)
1918	H.H.Coates (1918年まで) C.S.Davison (1919年まで) W.P.Buncombe (1920年まで)	W.Axling (1918年まで) A.Oltmans (1920年まで)

注) The Conference of Federated Missions, *The Christian Movement in Japan including Korea and Formosa, A Year book for 1914*, p.542. *A Year book for 1915*, p.538. *A Year book for 1916*, p.ix. *A Year book for 1917*, p.xii. *A Year book for 1918*, p.494. より作成。

日語学校の理事のうち、毎年5名は連合ミッション会議から選出されていたことがわかる。

校長は、日本の官立学校などで25年間英語教師をしていたフランク・ミュラーが就任した<sup>8)</sup>。彼は日語学校設立委員会が要望していた日語学校の目的を支持していた人物であった。日本語を教える教員は、田口夫妻、田口の姉妹の阿部、松宮、落合吉之助、野崎、久米、三上、小諸、そして数名の東京高等師範学校卒業生らをあげることができる<sup>9)</sup>。教員のうち5名は常勤で、2名は週3日、1名は週2日教えていた<sup>10)</sup>。日語学校の試験委員は、G.F.ドレイパー、R.J.キルビー（英国協会主任試験官）、H.上田（東京帝国大学）、三上参次（東京帝国大学）、芳賀矢一（東京帝国大学）が担当した<sup>11)</sup>。ドレイパーは連合ミッション会議の試験委員会の委員長でもあった。

授業の状況については、日語学校理事のコーツが次のように報告している<sup>12)</sup>。本科一年では、耳と音声の訓練が目的とされた。本科二年は、宗教の仕事に対する準備として、「宣教師のための特別コース」が示された。教授の基本的な考え方は、「母国語を学んできたのと同じコースにしたがって外国語を学ぶこと」であった。最終的には、「話すときにその国の人のことが理解できるようになること。そしてその結果、その国の人がするように話せること」を目標とした。「耳の訓練が最初であり、これが完全に成し遂げられたときに正しく話せるようになる」と考えられ、「心の準備の一部となるまで繰り返し聞いたことを正確に復唱すること」が要求された。

ところでこのような教授法は、誰が示したのだろうか。校長のミュラーは、校長に就任する前、「如何にしてミッションは言語問題を解決すべきか」と題する論文を発表した<sup>13)</sup>。ミュラーは論文のなかで、世界ミッション会議の報告「近代音声学は正しい発音を習得することにおいて明らかに大きな助力となる。近代音声学を家で勉強すべきこと。」をとりあげた。ミュラーはこの声明が不十分であると指摘し、正しい発音ではなく、音声学習とヒアリング練習が導く正しい話方の習慣を求めた。そしてT.F.カミングス(Thomas F.Cummings)の「宣教師に対する科学的効果的言語教授」と題する講義に関心を示した。

当時カミングスは、ニューヨークにある聖書教師訓練学校(Bible Teachers Training School)の教師であった。ミッションのフィールドで最良の言語教授法を奨励するために、ドイツやいくつかの極東のミッションセンターを調査で訪れていた。カミングスはこの冬に来日し、日語学校の前身である言語学校の調査を行った<sup>14)</sup>。ミュラーは一人の英語教師として来日中のカミングスの講義に参加した。

ミュラーはカミングスに出会う前、次のような考えを持っていた。

「舌は耳の奴隷である。そして舌は他の主人を認めない手に負えない器官なのである。神が我々が話すことができる前に何度も聞くべきだと定めてきたことは十分教育的だと考える。」

一方、カミングスは「目は決して話す人を教えなかった。聾者はいつも口がきけない。耳は舌の支配者である。」と考えていた。カミングスとミュラーは言語教授で耳を重視する点において共通性がみられる。六年間にわたるカミングスの実地教授の後、パンジャブのアメリカ長老派ミッションでは、新しい宣教師たちにカミングスの言語教授を採用することを義務づけた。四年後の1910(明治43)年10月、長老派ミッションの言語委員会の議事録には、「当委員会は、カミングスの言語学習システムが、方言、すなわちヒンドスタン語あるいはパンジャブ語の習得において最も重要だと判断した」と記された。カミングスの理論は、朝鮮の言語プランにおいても実施された。ミュラーは論文のなかで、日語学校でいつかこのミッションの経験が採用されるだろうと期待を寄せた。カミングスの講義を聴講し実演を視聴したことは、ミュラーの日本語教授法に影響を与えたと考えられる。こうして日語学校では、ミュラーの考えが反映していった。

初年度の日語学校では、授業のほか次の講義が開催された<sup>15)</sup>。

E.W.クレメント What to Read about Japan

F.ミュラー Some New Christian Literature in Japanese

内村鑑三 The Necessity of Having a Knowledge of Japanese Literature

W.インブリー On the Use of "Ga"and"Wa"

S.H.ウェンライト The Necessity of Having a Knowledge of Colloquial Japanese

「規則」第七条によれば、日語学校では三年間にわたり約週一度、講義が行われることになっていた。初年度の講義は数回実施されたことがわかる。

日語学校は1月から3月に17団体から52名、4月から6月に16団体から42名の生徒が入学した<sup>16)</sup>。学期毎に試験が行われ、1914(大正3)年6月11日に14名の生徒に対して卒業証書が授与された<sup>17)</sup>。

#### 4. 二年目の状況 —1914年から1915年—

二年目は本科一年20名、本科二年24名からスタートした<sup>18)</sup>。この年は、第一次世界大戦の影響を受けて一次生徒数が激減した。第一学年は6クラス、第二学年は4クラスに編成された<sup>19)</sup>。朝の二つのクラスには少なくとも8名の教師が必要であった。

コーツの報告を中心に二年目の状況をみていこう<sup>20)</sup>。日語学校では二年間は耳と舌の訓練が最も重要とされた。生徒は、数名の教師によって小クラスで学んだ。一クラスを3セクションにわけ、異なる教師から3レッスンを受けた。本科一年では、カードが与えられ、最初は平仮名が教えられた。約四カ月後には少し簡単で一般的な漢字をおりませて平仮名を学習した。生徒は教師の言うことを繰り返し聞き、それが何か言えるまでカードをみることができなかった。生徒にとっては耳だけが頼りであった。カードはあくまでも復習用であり、見るためのものではなかった。

本科二年では、4人の先生から4セクションを学んだ。3名の教員は新しい授業を行い、1人の教師は復習の授業を担当した。教材は一年次と同様にカードを会話の基礎として使用した。唯一教科書として使われたのは、日本語を学ぶための朝鮮人用の『普通学校国語読本』であった。また宗教上の文体を学ぼうとしている生徒に対しては、ピークが編纂した*First Reader for Home Study*が用意された。第2、第3読本の参考書としては、チェンバレンの*Handbook of Colloquial Japanese*とインブリーの*Etymology*が与えられた。生徒は最初は平仮名でメモをとっていたが、次第に漢字の割合を増やしていった。一カ月に二回の授業は漢字の体系的な教育を目的とした。

教材のカードについては、日語学校卒業生であるS.W.Ryderの記述によると次のようであった<sup>21)</sup>。カードはシリーズとダイアログから配列されていた。一年目のカードシリーズの一つは、朝鮮の普通学校で使われている『普通学校国語読本』を基本にしていた。第二シリーズは宗教のトピックをベースにしており、一般的な宗教用語のカードが準備された。また生徒が実際に使うことができるセンテンスを与えるために「日常生活」のシリーズのカードも用意された。

以上のことから、日語学校では一年目と同様に耳からの訓練によって日本語教育がなされたこと、教材は独自に作られたカードが中心であったことがわかる。それではこのような教育は、連合ミッション会議が認定する日本語教育課程に準拠していたのだろうか。次頁の【表4】は、1913（大正2）年に制定された日本語教育課程である。連合ミッション会議の試験委員会が内容改正の権限を持ち、【表4】はすでに数多くのミッションで採用されていた。

【表4】と前述した日語学校の状況を比較すると、日語学校では、【表4】とは異なる教材が使われていたことは明白である。日語学校ではカードを教材としており、参考書としてチェンバレンやピークの本が使用されている。【表4】では、このような教材については明記されていない。また【表4】では日本の『尋常小学読本』が採用されているが、日語学校では、朝鮮の『普通学校国語読本』が使われている。日語学校では、初年度から朝鮮の読本が使用されていた<sup>22)</sup>。また【表4】では一年目からランゲの本が推奨されているが、日語学校では、チェンバレンの本が使用されている。以上のことから、日語学校では連合ミッション会議の日本語教育課程とは異なる独自の教育課程と教授法によって日本語教育が実施されていたといえる。こうして二年目は、11名の卒業生を輩出した<sup>23)</sup>。

【表 4】1913年版日本語教育課程

1 年 目	
1 学 期	
1. 文法 2. 会話 3. 読方と翻訳 4. 書方と書取	ランゲText Book改訂版1～20章。読方と翻訳の学課として練習。 松田のText Book of Japanese Conversation1と2（20課）。 その本で先生やほかの人たちと自由会話。 『尋常小学読本』1と2。 『習字手本』にしたがって。松田の本あるいは『読本』から片仮名と平仮名。
2 学 期	
1. 文法 2. 会話 3. 読方と翻訳 4. 書方と書取 5. 暗記	ランゲのText Book21～38章。インブリーの動詞（2章）。 松田の本1と2（残）。その本で先生やほかの人たちと自由会話。 『尋常小学読本』3と4（試験としてではなく）読む。 チェンバレン『文字の志る辺』1章と2章。 『習字手本』にしたがって『読本』の漢字と仮名。 主の祈り、マタイ書1の21、ヨハネ書1の29、3の16、17。14の6。
3 学 期	
1. 文法 2. 会話 3. 読方と翻訳 4. 書方と書取 5. 作文 6. 暗記	ランゲのText Book34～60章。 次の題材：日常生活、社会通話、祝賀、弔辞について。先生やほかの人たちと自由会話。 『尋常小学読本』5と6。 巖谷小波の昔話（『舌切り雀』）。マルコによる福音書標準版1～5章。口語体に変えるため。 習字手本にしたがって『読本』の仮名と漢字。 単文と複文を口語体で。 『舌切り雀』から約150語に関連した段落。使徒行伝4の12。 ロマ書3の23、6の23。1テモテ書1の15。1ヨハネ書4の10。
2 年 目	
1 学 期	
1. 文法 2. 会話 3. 読方と翻訳 4. 書方と書取 5. 作文 6. ストーリーを話す練習	ランゲのText Book61～76章 日常生活、初歩的な宗教の知識について先生やほかの人たちと自由会話。 『尋常小学読本』7。田村直臣『廿世紀の日曜学校』半分。マルコによる福音書標準版6～10章。 口語体に変えるために。山鹿旗之進『耶穌基督』1～8章。 チェンバレン『文字の志る辺』第4。 口語体で複文。 次の6つの寓話の内容を話す能力。 The Unmerciful Servant, The Sower, The Ten Virgins, The Prodigal Son, The Rich Man and Lazarus, The Good Samaritan
2 学 期	
1. 文法 2. 会話 3. 読方と翻訳 4. 書方と書取 5. 作文 6. ストーリーを話す練習	ランゲのText Book77～81章。アストンWritten Languageの1と2章。 日常生活、一般的な宗教の話題について先生やそのほかの人たちと自由会話。 またランゲの逸話から生徒に選ばせるところを暗記させる（約150語）。 『尋常小学読本』8。山室軍平『平民の福音』第1章（27頁）。 使徒行伝1～10章。口語体に変えるために。 『文字の志る辺』第5（半分）。 口語体で複文と重文。 次の6つの奇跡の内容を話す能力。Water turned into Wine, Raising of Jairus' Daughter, Healing of Centurion's Servant, Feeding of Five Thousand, Healing of Paralytic, Healing of Syro-Phenician Woman's Daughter
3 学 期	
1. 文法 2. 会話 3. 読方と翻訳 4. 書方と書取 5. 作文	ランゲのText Book82～85章。アストンWritten Languageの3～5章。 宗教と非宗教的な最近の出来事について。 『尋常小学読本』9。創世記1～3、6～8、12章。福沢諭吉『福翁自伝』最初の3章。 今日の日本人牧師から3つの説教。（それぞれ50語以上）暗記するためにそれぞれから選ばれた一節。試験委員会で相談され選択された説教。 チェンバレン『文字の志る辺』第5（半分）。 祈祷と短い説教あるいは演説。試験官によって前もって割り当てられたトピック。
3 年 目	
1 学 期	
1. 文法 2. 会話 3. 書方と書取 4. 作文 5. 日本語翻訳 6. 書取	アストンのWritten Language6～10章。 翻訳とパラフレイズ。『尋常小学読本』10、11。賛美歌、1～3、16、23、27、32、45、51、90、110。 ヨハネの福音書。1から4章、6章、10章、13章、17章。 チェンバレン『文字の志る辺』第6、7。 祈祷、話し手に紹介しながら会議で議長の準備もする。 読み物を選択する。1の半分。 秘書に対して口語体で手紙の書取。
2 学 期	
1. 読方 2. 書方と書取 3. 作文 4. 日本語翻訳 5. 通訳	翻訳とパラフレイズ『尋常小学読本』12。尾崎徳太郎『多情多恨』75頁。『福翁百話』30章。 イザヤ書11章の1～10、40、42、53、55、60。ヤコブ書1～5章。 チェンバレン『文字の志る辺』8と9。 文学の形式で。試験の時、試験官によって割り当てられる短い説教あるいは、トピックについて書かれた演説。 読み物を選択する。2の半分。 書簡形式で簡単な手紙を口語体に通訳する。
3 学 期	
1. 読方 2. 書方と書取 3. 作文 4. 日本語翻訳	翻訳とパラフレイズ。『小学日本歴史』1と2。徳富蘆花『思出の記』1と2部。箴言1、4、8、9、16、20、22、24、31章。ロマ書1～3章、5～8章、12章。 チェンバレン『文字の志る辺』10、11、12。 即興の説教あるいは演説。試験の時に試験官によって割り当てられるもの。また文語と書簡の形式で。 読み物を選択し、2の半分。

注）“THE REVISED COURSE OF STUDY IN THE JAPANESE LANGUAGE” *The Japan Evangelist*, Nov.1913, pp.504-506より作成。

## 5. 三年目の状況 —1915年から1916年—

三年目は、9月24日から開始された<sup>24)</sup>。本科一年16名、本科二年19名であった。本科の生徒はみなキリスト者であったが、日本の学校に入学しようとしているフィリピンから来た青年と台湾から来た三名の宣教師もいた。この年は、新しく特別クラスが設けられた。特別クラスの生徒はビジネスマン、個人秘書、朝鮮から来た宣教師、大学教授、イギリスで教育を受けた日本人少女の5名であった。午後のクラスと特別クラスは東京外国語学校で行われた。朝は空き教室がないため、朝のクラスはY.M.C.A.の近くで行われた。

教員は6名の女性教師と2名の男性教師で構成されていた。三年目に入ると、カード教材は学年毎に準備された。一年目に唯一使われた教科書は『普通学校国語読本』の一、二であり、会話の基礎として使われた。二年目は、「日常生活」と「宗教上のトピックス」のシリーズが続けられた。読方のレッスンはなかったが、二年目に入ると前日に聞いた聖書の韻文を文語や口語で読んだりした。唯一講読が行われたのは、二年課程を修了して三年目に入る通信科であった。講読用の教材は、『普通学校国語読本』七や新版口語体マルコの福音書、『基督教百話』などであった。三年目は10名の卒業生を送り出した<sup>25)</sup>。

## 6. 四年目の状況 —1916年から1917年—

1916（大正5）年9月、「私立日語学校規則」が改正された<sup>26)</sup>。改正点は、第一に学年暦を9月21日から翌年の9月20日までとしたこと。第二に、本科第一学年の授業時間数を15時間から25時間へと増加したこと。第三に、授業料の改正である。本科の授業料は120円から200円（一学期80円、二学期70円、三学期50円で分納）、速成科は72円から80円（7、8月を除き毎月8円）、夫婦の場合は一人90円から180円に引き上げられた。

生徒の授業料を主体として学校経営を行っていた日語学校では、創設当初から経営上の問題を抱えていた。日語学校では、規定された年限を履修する生徒がほとんどおらず、予定の授業料を徴収することができなかった。今回の授業料の値上げはその点を考慮したものと考えられる。

四年目は、一年生40名、二年生と特別生13名から始まった<sup>27)</sup>。この年、日語学校の実行委員会は、生徒たちが自身のミッションや日本の教会と接触を図れるように学生助言委員会（Committee of Advisers to Students）を組織した。同委員会の職務は、日語学校の理事と協力し、個人的な助言をしたり、次のような補助をするアドバイザーを生徒に与えることであった。

- ①個人的な問題、食費、下宿、健康、社会的用務。
- ②学校外の仕事。授業の予習。
- ③付随する読方課程。
- ④日本人との関係。日本人と会話したり、普段日本人と接触する計画を含む。
- ⑤地方の日本人教会や宗教的リーダーと積極的に親交を図る。
- ⑥少なくとも休暇中に田舎で福音事業を行うための連絡を図る。

⑤と⑥は特に宣教師の生徒に対する内容である。初年度は12のミッションが同委員会のメンバーを任命し、翌年から活動は実施された。日語学校では、生徒の日本語教育の充実と各ミッションとのつながりをより強力にするために生徒に対する個別の支援体制がとられたといえる。



1917（大正6）年1月、第16回連合ミッション会議が開催された。会議では、次頁の【表5】のように日本語教育課程が改訂された。そこで【表4】の1913年版日本語教育課程と【表5】の1917年版日本語教育課程を比較してみよう。変更点は次のとおりである。

- ①一年次にはランゲの本が使われていたが、チェンバレンの本に変更した。
- ②ランゲの本は二年次から使用されることになった。
- ③ピークの本が採用された。
- ④アストンとインブリーの本は使用されなくなった。
- ⑤暗記は一年次だけでなく、二年次にも行われるようになった。
- ⑥三年次については、バイブルクラスが導入された。

これらの変更点と前述してきた日語学校の実態を鑑みると、日語学校の教育実態に合わせた教育課程に改正されたことがわかる。

1917（大正6）年2月24日、校長のミュラーは体調の回復を目的として半年の休暇をとるため、婦人とともにシアトルに向けて出帆した。ミュラーの不在中は、日本人教師の管理のもとで青山学院のデヴィソン（C.S.Davison）が監督をし事実上の校長を務めた<sup>28)</sup>。しかし4月19日、ミュラーはタコマで病死した。デヴィソンは9月に長崎に移動するまで日語学校の補助者として尽力し、アメリカ・オランダ改革派のオルトマンズ（A.Oltmans）が副校長に就任した。四年目は、本科8名、通信科3名の計11名の卒業生を送り出した<sup>29)</sup>。

## 7. 五年目の状況 —1917年から1918年—

日語学校は、9月25日から始まった<sup>30)</sup>。授業料は200円の据え置きであった。入学式では、司会を校長の村上直次郎が行い、オルトマンズが演説をした。

この年は、阪谷芳郎が名誉理事、村上直次郎が校長、オルトマンズが副校長、福岡秀猪が監査役、ペティが秘書、アキスリングが財務を務めた<sup>31)</sup>。一学期の生徒数は、一年生30名と二年生15名の計45名と、通信課程一年1名と二年12名と三年13名の計27名のトータルで72名であった<sup>32)</sup>。日語学校の生徒は依然として宣教師が多かったため、五年目から従来の三年目の通信科を一年から三年までの三年制の通信課程に整備した。通信課程の授業料はカード代と教科書代に当てられた。

日語学校の理事らは適当な外国人校長を見つけられない状況であった。理事らは可能な限り日語学校の仕事を支え続けた。委員会のメンバーのなかには、クラスを担当する臨時の助手になってくれる人もでてきた。

この年は、役人や教師や生徒の自発的な助けもあり、とくに興味と価値のある特別講義が開催された<sup>33)</sup>。講義の内容は、次のとおりである。

E.W.クレメント	The History of Japan
A.Rose-Inness	How to learn the Language
A.K.ライシャワー	Buddhism
E.ガントレット	Phonetics
H.ペドレイ	Language
Message	Personality

通信課程の生徒数は、1918（大正7）年3月時点で、一年2名と二年12名と三年14名の計28名であった<sup>34)</sup>。通信課程の生徒は地方に住んでいるため、札幌、山形、仙台、横浜、

【表 5】1917年版日本語教育課程

1 年 目	
1 学 期	
1. 文法	チェンバレンのハンドブック 1～4 章。
2. 会話	松田 <i>Text Book of Japanese Conversation</i> 1 と 2 (20 課) と自由会話。
3. 読方と翻訳	『尋常小学読本』1 と 2。
4. 書方と書取	松田の日本語会話の教科書と読本から片仮名と平仮名。『習字手本』にしたがって。
2 学 期	
1. 文法	チェンバレンのハンドブック 5～8 章。
2. 会話	松田の日本語会話の教科書 21 課～40 課。教師やほかの人たちと一緒に自由会話。
3. 読方と翻訳	『尋常小学読本』3 と 4。
4. 書方と書取	読本のなかの仮名と漢字。習字手本にしたがって。
5. 略記	主の祈り。マタイによる福音書 I の 21。ヨハネ書 1 の 29, 3 の 16～17, 14 の 6。
3 学 期	
1. 文法	チェンバレンのハンドブック 9～12 章。
2. 会話	教師の指示のもと日常生活の出来事, 社会通話, 祝賀と弔辞に関する自由会話。
3. 読方と翻訳	『尋常小学読本』5 と 6, 巖谷の昔話 (『舌切り雀』)。
4. 書方と書取	読本の仮名と漢字。『習字手本』にしたがって。
5. 作文	口語体で短文。
6. 略記	『舌切り雀』と関連したパラグラフを約 150 語で。使徒行伝 4 の 12。ロマ書 2 の 23, 6 の 23。 I テモテ書の 1 の 5。I ヨハネ書 4 の 16。
2 年 目	
1 学 期	
1. 文法	書き言葉についてチェンバレン『文字の志る辺』第 2 部。ランゲのテキストブック 1～20 章。注に特別な注意を払って。きわめて重要な翻訳能力。多くを記憶にゆだねることが望ましい。
2. 会話	日常生活の出来事と初歩的な宗教のトピック。
3. 読方と翻訳	『尋常小学読本』7。ピークの読本の 1～74 頁。
4. 書方と書取	チェンバレン『文字の志る辺』第 4 節。
5. 作文	ピークの <i>Suggestions for the Study of Character</i> を参照。
6. ストーリーを話す練習	口語体で複文。
7. 略記	次の 6 つのパラグラフの物語を子どもに話す能力。The Unmerciful Servant, The Sower, The Ten Virgins, The Prodigal Son, The Rich Man and Lazarus, The Good Samaritan チェンバレンのハンドブックで普遍的に使う諺と短いフレーズ。
2 学 期	
1. 文法	ランゲの教科書 21 から 60 章。
2. 会話	日常生活の出来事と一般的な宗教のトピックスを教師やほかの人と自由会話。
3. 読方と翻訳	『尋常小学読本』8。山室軍平『平民の福音』第 1 章 27 頁。
4. 書方と書取	チェンバレン『文字の志る辺』第 5 節半分。
5. 作文	口語体で複文と重文。
6. ストーリーを話す練習	試験のとき割り当てられた課題の短いエッセー。
7. 略記	次の奇跡についてなにか内容話す能力。Water Turned into Wine, Raising of Jairus' Daughter, Healing of Centurion's Servant, Feeding of Five Thousand, Healing of Paralytic, Healing of Syro-Phenician's Daughter ランゲの逸話から生徒によって選ばれたところ (約 150 語で)。
3 学 期	
1. 文法	ランゲの教科書。61 章から最後まで。
2. 会話	宗教と非宗教的な最新の出来事。
3. 読方と翻訳	『尋常小学読本』9。福沢諭吉『福翁自伝』3 分の 1。試験委員会によって選ばれた今日の日本人牧師からの説教。
4. 書方と書取	チェンバレン『文字の志る辺』第 5 節半分。
5. 作文	試験官によって前もって割り当てられた課題に関する短い説教と演説。
6. 短く話すこと	創世記の第 1 から 3, 6～8 と 12 章からの物語。
7. 略記	3 つの説教の学習からそれぞれ 100 語で少なくとも 2 節。
3 年 目	
1 学 期	
1. 読方と翻訳	『尋常小学読本』10 と 11。余は如何にして確信を得しやの 70 頁。チェンバレン『文字の志る辺』6 と 7 節。テキストを読む能力と内容から離れて表意文字を認めること。
2. 作文	祈祷。試験の時, 試験官によって与えられる祈りの目的。(ピークの <i>How to Pray in Japanese</i> をよきモデルにして) 会議の議長職の準備。話手の紹介など。ある秘書に対する口語体の手紙。
3. バイブルクラスの説明	次の賛美歌の聖書クラスに対する簡単な説明 1～3, 16, 23, 27, 51, 90 と 110。ヨハネによる福音書の第 1～4, 6, 10, 12, 17 章。
2 学 期	
1. 読方と翻訳	『尋常小学読本』12。思い出の記の 1 と 2。チェンバレン『文字の志る辺』第 8 節。テキストを読む能力と内容から離れて特徴を認める。
2. 作文	試験の時, 試験官によって割り当てられたトピックで書かれた短い説教と演説。
3. 日本語翻訳	Stalker's Life of Paul の第 1 と 2 章。
4. バイブルクラスの説明	次のバイブルクラスへの簡単な説明。イザヤ書 11 の 1～10, 40, 42～53, 55, 60 章。 ヤコブ書第 1～4 章。
3 学 期	
1. 読方と翻訳	『小学日本歴史』1 と 2。福沢諭吉『福翁百話』の第 1～30 章。
2. 作文	チェンバレン『文字の志る辺』の 9 と 10 節。
3. 翻訳	テキストを読む能力と内容から特徴を認める。
4. バイブルクラスの説明	試験の時に試験官から割り当てられた課題の説教と演説を即座に。 ラムのシェイクスピア, ペニスの商人の半分。 箴言の 1～4 章, 31 章。ロマ書の第 3, 8, 12 章。

注) “REVISED COURSE OF STUDY IN THE JAPANESE LANGUAGE” The Conference of Federated Missions, *The Christian Movement in the Japanese Empire including Korea and Formosa, A Year Book for 1917*, Jun.1917, Appedix VI, pp.xxxii-xxxv より作成。

金沢、京都、大阪、神戸、姫路、松山、下関、大分、福岡、長崎の14支部に宣教師の試験官補佐（Assistant Examiners）が置かれた。日語学校は東京の本校を拠点として、地方支部との連携を図りながら通信課程の充実を図っていったと考えられる。

## 8. まとめ

1918（大正7）年9月、アメリカ・バプテスト教会のアキスリング（W.Axling）が外国人校長として就任した。本稿では、ミュラー校長時代をアキスリング校長に至るまでと捉え、開校してから五年間の日語学校の実態について分析してきた。

日語学校は初年度、本科一、二年と夜間コースを設置した。三年目からは通信科を導入し、五年目には通信科を三年間の通信課程に整備した。当初は本科は三年制を計画していたが結局三年課程は実施されなかった。通信課程を導入したり、学生助言委員会を設置するなど、生徒のニーズに応じた教育で対応した。日語学校は、当初予定していた入学者数が常に満たなかったことや、生徒の入退学が頻繁なため、学校経営に関わる授業料の確保が難しかった。そのため授業料を上げる措置をとったりした。

日語学校の教育課程や教授法は、ミッション連合会議で定められたものとは異なっていた。特に教材にカードを用い、耳から繰り返して聞いて話すことを求める教授法は、校長のミュラーの考えによるものであった。ミュラーは、英語教師として言語教授における耳の重要性を指摘していたが、日語学校創設前に、同様な考えを持っていたカミングスの教授法と実践に触れ、日語学校で耳から始める日本語教授法の実践に踏み切った。教材のカードは日語学校で独自に作成された。日語学校で日本語教師としてミュラーと共に働いていた松宮弥平は、ミュラーについて次のように語っている<sup>35)</sup>。

「終に現に日語学校が採用して居るカード使用の教授法を試みるやうになつたが、さて其のカードを作るにしても二年級のものこそ重に其の担任教師に任されたれ、初学年のものの如きは始終ミュラー氏自身が一々其の教授すべき材料の選択配量等をなし、且教師には一々其の教授の方法を伝示して教壇に立たしめられたこともある位であつたから、かういふ方面のことには我々日本人であつて日本語を教授するものでさへも、頗る困難時とするところであるのに、況してミュラー氏が三十余年を日本に送つたとはいへ、とにかく外国人であつて自分には外国語である日本語の材料から用語の取捨整理までも自ら為されたといふは、如何にそれが困難事中の最難事であつたかといふことに想倒せずには居られない。

殊に創業当時は教師を得るに困難であつて、高師帝大其他からも依頼された人は多数であつたが、ミュラー氏の採られた教授法を巧に運用する適任者が誠に少なかつた。従つて教師の出入が瀕繁で落付いて綿密に従事することの出来るものは殆ど無かつたところから、一学年の教授にはミュラー氏が自ら其の中心に立たねばならないやうな工合になつて、ミュラー氏がさなきだに負ひ切れない程の責務を双肩に担ふて最も苦心せられたのは即ち此の頃であつた。」

ミュラーは校長でありながら、自ら教材開発をしたり、日本語教師に教授法を伝授したり、生徒に実際に日本語教授を行ったりしていた。日語学校の最初の五年間の教育は、ミュラーの考え方や実践が色濃く反映した。しかしその一方で、日語学校は問題も抱えていた。教材や教授法が決定していても、それを使って日本語教育ができる日本語教師の確保が難しかったこと<sup>36)</sup>。また独自の教育課程を採用していたことから、宣教師である生徒

は日語学校の試験とミッションの試験を二重に受験しなければならなかった<sup>37)</sup>。日語学校がこのような課題をどのように克服していくのかについては、今後の課題としたい。

注

- 1) 武田祈「日語文化協会日語文化学校」日本語教育学会編『日本語教育事典』大修館書店、1982年、697-698頁。
- 2) 日語学校の創設経緯については、拙稿「日語学校創設に果たした在日宣教師の役割」(同志社大学人文科学研究所編『キリスト教社会問題研究』第53号、教文館、31-52頁)を参照されたい。
- 3) 「学校設置 日語学校」1913年、東京都公文書館所蔵資料『東京府文書』。(東京府文書館所蔵)
- 4) H.H.Coates “THE JAPANESE LANGUAGE SCHOOL” *The Japan Evangelist*, Feb.1914, p.81
- 5) “NEWS NOTES AND COMMENTS” *The Japan Peace Movement*, vol.1-11, Oct.1913, p.4
- 6) 前掲4), 82頁。
- 7) 前掲4), 80-81頁。
- 8) Frank Müller “THE JAPANESE LANGUAGE SCHOOL” *The Conference of Federated Missions, The Christian Movement in Japan including Korea and Formosa, A Year Book for 1914*, Jun.1914, p.260 ミュラーはイギリスで生まれ、大学時代はアメリカで過ごした。来日後、和歌山中学校、呉の海軍兵学校、神戸高等商業学校、高千穂中学校、青山学院で教鞭をとっている (S.H.Wainright “FRANK MULLER” *The Conference of Federated Missions, The Christian Movement in the Japanese Empire including Korea and Formosa, A Year Book for 1918*, Aug.1918, p.295)
- 9) 同上、ミュラー、261頁。「雑事一束」樋口勘治郎編『平和時報』第11号、大日本平和協会、1913年10月15日、16頁。前掲4), 82頁。
- 10) 前掲8), ミュラー、261頁。
- 11) 前掲4), 82頁。
- 12) 前掲4), 81頁。
- 13) Frank Müller “HOW ONE MISSION SOLVED THE LANGUAGE PROBLEM” *The Japan Evangelist*, Apr.1913, pp.198-199
- 14) Thomas F. Cummings “A SCHOOL FOR TEACHING JAPANESE” *The Japan Evangelist*, Aug.1913, p.363
- 15) “LECTURES BEFORE THE JAPANESE LANGUAGE SCHOOL” *The Japan Evangelist*, Aug.1914, pp.334-335 前掲4), 82頁。内村鑑三によると、これらの講義は英語で行われていたことがわかる (内村鑑三「日本の文学の知識をもつことの必要」道家弘一郎訳『内村鑑三英文論説 翻訳篇』下巻、岩波書店、1985年、262頁)。
- 16) 前掲4), 83頁。
- 17) 「日語学校卒業式」『平和時報』第2巻第7号、大日本平和協会、1914年7月25日、12頁。初年度は、第一学年29名、第二学年17名の合計46名の生徒が在籍し、彼らはみなミッションの仕事をするための準備をしていた (前掲8), ミュラー、262頁)。

- 18) Frank Müller “THE JAPANESE LANGUAGE SCHOOL” *The Conference of Federated Missions, The Christian Movement in the Japanese Empire including Korea and Formosa, A Year Book for 1915*, Jun.1915, p.220
- 19) 同上, 221頁。
- 20) Harper H. Coates “JAPANESE LANGUAGE SCHOOL” *The Japan Evangelist*, Jan.1915, p.48
- 21) 前掲18), 225頁。
- 22) “Japanese Language School” *The Japan Evangelist*, Jan.1914, p.29
- 23) Frank Müller “THE JAPANESE LANGUAGE SCHOOL” *The Conference of Federated Missions, The Christian Movement in the Japanese Empire including Korea and Formosa, A Year Book for 1916*, Jun. 1916, p.186
- 24) 三年目の状況については, 同上, 186-194頁。
- 25) Gilbert Bowles “THE JAPANESE LANGUAGE SCHOOL” *The Conference of Federated Missions, The Christian Movement in the Japanese Empire including Korea and Formosa, A Year Book for 1917*, Jun. 1917, p.216
- 26) 「規則改正 日語学校」東京都公文書館所蔵資料『東京府文書』, 1916年9月12日。  
(東京都公文書館所蔵)
- 27) 四年目の状況については, 前掲25), 216-217頁。
- 28) 前掲25), 219頁。
- 29) James H.Pettee “THE JAPANESE LANGUAGE SCHOOL” *The Conference of Federated Missions, The Christian Movement in the Japanese Empire including Korea and Formosa, A Year Book for 1918*, Aug.1918, p.138
- 30) J.H.Pettee “TOKYO JAPANESE LANGUAGE SCHOOL” *The Japan Evangelist*, Oct.1917, p.370
- 31) 前掲29), 139-140頁。
- 32) 五年目については, 前掲30), 370頁。
- 33) 前掲29), 138頁。
- 34) 前掲29), 139頁。
- 35) 松宮弥平「ミュラー氏と日語学校」『福音新報』第1143号, 1917年5月24日, 3頁。
- 36) ミュラーは創設一年目にして, 教授能力のある男女を見つけることと, 彼らに近代教授法を教えることが非常に難しいと述べている(前掲8), 263頁)。
- 37) コーツは二年目に日語学校の問題点としてこのことをあげている(前掲20), 50頁)。